# 歌うモノ

NAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歌うモノ

【Ｎコード】
Ｎ００３６Ｍ

【作者名】
ＮＡＭ

【あらすじ】
少々風変わりな大学生の青年と、枯れ果てた歌姫の物語。
存在意義を枯らし、風化しかけの少女（モノ）、夢が消え失せ、悲しみを溜め込んだ青年（ヒト）。
カタチは違えど、自己表現の方法を無くしてしまったモノとヒト。
モノは取り戻すためにヒトに縋った、ヒトは吐き出すためにモノを認めた。
ヒトはモノを欲するが故に、モノはヒトになろうと苦悩する。
そしてヒトとモノは試される。

彼らは結ばれるのか、さて。

## 第一章《枯れた少女》

科学技術は目覚しい進歩を経て、ある種の過渡期ともいえる時期に入っている。

様々な新資源が発見され、様々な新素材が開発され、様々な新技術が考案され、様々な新機材が制作された。

目視不可能の極々細密な部品や超高温を維持する燃料、亜音速に到達する旅客航空機や神経を再生する薬品等々。

その中でもロボット技術も素晴らしい進歩を遂げた。

繊細な力加減の操作を可能にする人工筋肉。

モース高度１４以上、ダイヤモンドに次ぐ硬度でありながらも軽量化が図られた鋼鉄骨格。

人と同じように教育すれば成長し、また環境によって人格の変化に富む人工知能。

ロボットは人が到達出来ない環境を容易に進行し、人が行使出来ない技能を発揮してみせる。

宇宙を泳ぎ、星を渡るロボットがあった。

深海を歩き、放射能廃棄物を埋めるロボットがあった。

溶岩を潜り、大陸プレートを測定するロボットがあった。

それらは主に研究及び作業用の特化型だが、それ以外にも一つ、制作されているロボットがある。

《オート・ロイド》と呼ばれるモノがある。

ロボットは予てより、人を創り上げようという目標があった。

人と同じ身体を、人と同じ機能を。

人のように生活し、人のように考える。

人と同じように在ることで、人の良きパートナーになるように。

そして、それは実践された。

鋼で作られた軽量骨格、それを覆うように人工筋肉が編まれる。

光ファイバーで結われた神経を張り巡らし、新開発された人工皮膚を着せていく。

勿論、ソレに収められるのも人と同じ。

摂取した食物を吸収しエネルギーに変換する胃腸、身体を常に監視し有害物や老廃物の処理を行う肝臓や腎臓等、身体を構成し維持する機能を持つ装置は全て内蔵。

眼球や鼻、舌や鼓膜等の感覚機関も設置。

それらを統括する人工知能は様々な人格、価値観、嗜好を設定出来

るように人工脳髄にインストール。
そして完成されたのは《自動機人(オート・ロイド)》。
人によって組み上げられた、都合の良い絡繰人形だった。

†

## 第一章《枯れた少女(モノ)》

その日は朝から憂鬱を絵に書いたような雨だった。
もう日にちが変わる時間帯だというのに空は変わらず灰塗れの雲を浮かべ、その隙間から雫を零す。
しとしと、しとしと、と泣くように。
濡れたアスファルトを傘を差しながら歩いていく。
何回見ても空が泣き止む気配は無い。
無色透明の涙は紺色の傘を叩き訴える。
それが堪らなく煩わしい。

「まったくもってツイてない」

零れる言葉も虚空へ消える、たった一人の帰り道。

冷たさを感じるのは水を吸ったズボンの裾、シャツの肩。

幸いにして靴の中は無事であるが外は泥で汚れ、このままでは心許無い。

ソレも全てバッグの中にあるプリントや本の死守のためだ、これらが濡れては単位も流れる。

故に他が濡れてしまうのは仕方ないこと、と理解しているし納得出来ることでもある。

あるのだが。

「煩わしい」

視線を上げ、浮かぶ灰色の綿を睨んでみる。

しかし当然変化は無く、その返答は依然として水を大地へ振り撒くのみ。

無駄な行いだと知っている。

雨は天の恵み、無くては作物は育たず飲み水の確保も困難。
雨とは気象の一つであり、地球の循環器であり、空の機嫌。
人一人の行動でどうにかなるのもじゃない。
そんなこと、この星に生まれ二十年以上生きているのだから判っている。
しかし悪態を吐いたって良いだろう？
傘を差すこと自体、途轍もなく億劫に感じるのだ。

「しかし、本当にツイてない」

今日は友人が企画した小さな飲み会があった。
だが俺は生来、付き合いが良いとは言えない。
中学の同窓会は顔を出して一次会で解散、高校の文化祭等の打ち上げはいつも隅の席、友人に誘われたって一～二杯程度で終わらせる。
そんな俺の手を引っ張り、強引に連れ出す友人。
オィ、俺は男と手を繋ぐ趣味など無い。

「お前なぁ、ほんの少しだけでもいいから付き合えって。今日のメンバーはスゴイぞ？綺麗から可愛い系まで、初心なロリやナイスバディなお姉さんまで勢揃いだ。……くぁー、俺頑張ったってつくづく思うね」

これからさらに頑張るけどな！と、彼は喜び勇んで居酒屋への道程を先導する。

一応知人だ、友の努力が報われることを願いたい。

「そんな顔しないでお前も女の子口説いてみろって。女の子はいいぞ。特に柔らかおっぱいと丸っとしたお尻は至宝だね！」

撤回、泡沫と化せと呪ってみる。

見事に俗世間の色欲に溺れきった言を流しながら溜息。

栓無きことかと心中で呟きながら、俺は居酒屋に足を踏み入れたのだ。

――――それで、だ。

「阿呆が、お前たちが飲まれてどうする」

酒とは基本、計画性を以って嗜まなければならない。
アルコールとは人体にとって有害な物質であるために、人の脳を麻痺させ酔わせる。
故に自らの代謝能力を把握し、飲む量や質、ペースを調整しなければならない。
それを無視して飲み続ければ当然、脳がシャットダウンして酔い潰れるだけだ。
丁度、目の前で酒気を遺憾無く漂わせる狼の成り損ないのように。
座敷に大の字で潰れるなんていっそ清々しさすら感じるな。

「あの、その人たち、大丈夫ですか？」

参加していた女子が幾人か、心配そうに視線を向けている。
女性は男性よりいくらか精神が育っていると聞くが、この状況でその実を垣間見た気さえした。

「あぁ、おそらくは平気だろう。タクシーに放り込んで帰ってもらうことにする」

「はぁ、そうですか。私たちこれからカラオケに行こうと思ってるんですけど、お兄さんもどうですか？」

短い茶髪の女子に促され後ろを見れば、男性陣の生き残りは俺以外に三人ほど、酒に慣れた連中だろう。

それに比べて女性陣は半数以上酩酊とまでは至ってないほろ酔い、といった状態だった。

なんて情けないと溜息一つ。

「いや、此処に転がってる馬鹿共を片付けねば。それに会で判ったと思うが、俺は面白味の無い方でな」

そして正直な話、とっとと帰りたい。

「俺よりも其方の男子がエスコートしてくれるだろう。それでも酒が入ってるから送り狼に注意することを勧める」

女子よ、君の後ろに戯言を吐いた阿呆の同類がいるのだぞ？

割と本気で注意したのだがその言葉に彼女はあははと小さく笑い、少し細い目をさらに細めた。

「そうですね、その点お兄さんは殆ど素面ですし」

「前後不覚になるほど飲まなかっただけだ。これでも多少は酔っている」

「それでもテンション変わっていないですから大丈夫だと思います。それにちょっとお願いしたいことがあって。隅の方にいる子たちなんですけど」

「アレか。電車で来たのかもしれないが、近いならタクシーを呼ぶか？」

俺の提案に、律儀にもお願いしますと返された。

「お兄さんが送り狼にならないでくださいね？」

「……生憎と、勢いで襲えるほど酔っていない」

もう一度溜息、対して女子は酒の入った赤ら顔で笑みを浮かべる。

「ああ、それから」

そして二次会メンバーが店を出るその直前、先の女子が戻ってきて。

「お兄さんは自分のことを面白味が無いって言ってましたけど、結構人気ありましたよ？」

それじゃあまたー、と店を出て行く茶目っ気溢れる女子……もちろん、世辞だ。

それを見送った後、俺は店員を呼んだ。

「阿呆だな……、俺」

時は現在へ戻る。

元々は電車で帰る筈だった。

タクシーを使うほど持ち合わせが無かったこともあるが。

適当に数杯グラスを傾け、腹に幾らかのつまみを入れて、一次会でさっさと帰る予定だったのだ。

少なくとも、終電を逃す予定は無かったのだ。

幹事である阿呆が調子に乗って酒を入れ、酔い潰れてさえいなけれ

ばアフターケアする必要なぞ、欠片一粒ほどもありはしなかったというのに。

……引き際を見誤ったのも原因の一端だが。

そして全員をタクシーに放り込んだ頃、駅はもう帰り支度をする職員がいた。

金無し電車停止、移動手段は当然徒歩のみ。

外は雨、使用予定の無い折り畳みの傘をバッグから引っ張り出すことすら恨めしく感じていた。

「畜生が」

本当に情けないのは誰だ、終わったことをグダグダと。

今になって酔いが回ったのか、先から同じ思考が回る。

呆け具合からして、風呂に入れば浴槽にすんなりと沈みそうだ。

無論、横になればベッドと言わず廊下、下手をすれば玄関先で寝れる。

月日は四月下旬で春中盤、雨も手伝って外気は冷たいようだが、どうも酒のせいで涼しいぐらいにしか感じなかった。

そんな状態で家までの道中にある、暗い河川敷の外をゆるりと歩く。

足腰をふらつかせるという、見た目にも心中的にも情けない愚行は犯さない。

そんなものを見せれば擦れ違うお巡りに職質でもされかねないし、無駄にはしゃぐ似非不良共に目を向けられたくもないからだ。

意識は明確に、体は的確に、判断は迅速に。

相も変わらず軽く麻痺した脳を悪態につぎ込み、やけに軽く感じる四肢を動かす。

行き先を見据えながらも時折足元へ目を向けながら。

そして意識せず、左手に流れる川に視線を逸らしたら。

———ふと、視界の隅に動く何かを見た気がした。

「……何だ？」

岸と岸を渡す橋の下、陰となって見えない位置。

そんなに増水はしていないが、雨の日に川辺で寝泊りするホームレスはまずいない。

下手をすれば睡眠中に仮設住宅ごと流されて溺死だ。

今の時間は人通りも多くなく、遊べるような場所なら駅周辺のほうが余程ある。

野良の犬か猫でも見たのかとも思ったが、それにしてはサイズが大きいような。

――――ここで見間違いと思って放っておけばいいものを。

「ふむ」

呟きを一つ落とし、階段に足を向けて河川敷へと降りてみた。

アレだ、酔っているせいだ、それによっての気の迷いだ。

と、ワケも判らず心中で言い訳をしている辺り、中途半端に酔っていた。

階段下りれば湿った芝生が広がっており、緩んだ地面が軽く足を沈める。

水溜りが出来ていないのが幸い、泥跳ねの心配はあまりしなくていいだろう。

「鬼か蛇か、はたまたそれ以外が出るのか」

此処に来て発揮された、滅多に使われない野次馬根性に身を任せて歩を進める。

一歩、二歩、三歩。

ブレ無く真っ直ぐ迅速に進む足に反してゆらりゆらりと思考の波が揺れる揺れる。

最低限の警戒をと、体は調子に乗った脳を戒める。

興味本位で進めと命令する頭とは裏腹に、下半身は危機在れば走り出しそうなほどの逃げ腰だった。

あんな場所にいる連中なんて相場が大体決まっている。

オヤジという年齢ではないが、俺とて狩られたくはなかった。

そう予想を頭で転がしながらも俺は橋の下へと近づいていく。

いくらか進めば見えるかと思えば街灯も無い河川敷、橋の下なぞ見えるわけも無い。

夜目に慣れても外からじゃまだ見えないほどの薄気味悪い暗闇が、俺に“おいでおいで”と囁いていた。

「……ハッ……」

鼻で笑い飛ばし、躊躇無く歩を進めた。

さて、ドコの阿呆がこんな場所で遊んでいるのか。

そう思って踏み入れた薄闇の中。

――――“ソレ”を目にした瞬間、己の一切合財が一気に冷めた。

其処に在ったのはヒトカタ。

橋の支柱に寄り掛かって脱力し、完全に体を預けた一つの人影。

体の大きさや顔を見ての予想として、年の頃は凡そ１８歳前後の女性。

本来は綺麗だったのだろうその肌は顔・体関係無く泥で汚れ、乱れた衣服は水を吸ってベッタリと肌に張り付いている。

黒く長い髪は解かれたのか、地面にぶち撒けたかのように広がって泥水に沈んでいる。

口は呆けたように半開き、目は虚ろのままで視線が虚空に浮いていた。

「死んで、はいないのか？」

あまりの惨状に一瞬死体かと見紛ったが、俺の目が呼吸によってか動く胸を捉えられた。

辛うじてまだ保っているらしい。

しかしこのままでは低体温症で死ぬだろうことは予想出来た。

――――だというのに俺の頭は異常なほど冷め切っていた。

他人が何処かで野垂れ死んでいようと関係無かった。

人が死ぬなんてよくあることだ。

救急車を呼んでやってもいいが、そんな必要なんてない。

そもそもよく見れば、少女は人間ではなかったのだから。

「自動機人（オート・ロイド）……？」

近寄ってみてみれば、その決定的な違いが見て取れた。

正面を覗く双眸はガラスの瞳、触れば判る劣化の少ない人工物である皮膚と髪。

右手を持っても脈は感じられず、皮膚が切れているのに赤い血液が滲んでもいない。

極め付けは首筋にあった奇妙なスリット。

開いてみれば其処に据え付けられた、大小様々な接続端子。

此処に在るのは少女の形をした“何か”だった。

見るも無残な死体ではなく、唯の邪魔な粗大ゴミだった。

それだけ、それだけなら、まだ良かった

それだけなら、まだ許せた。

それだけなら、まだ気にも留めなかった。

何処かの誰かの廃棄物で終わり、俺は見なかったことにしてそのまま帰ることが出来た。

しかし、しかしだ。

俺にとって、無視出来ないモノが見えてしまった。

俺にとって、気に入らないモノを見てしまった。

――――その体の至る所にへばり付いた、まだ乾いていないシロイナニカ。

ソレが、俺を冷却した最も大きな原因だった。

「人間というのは、やはり変態しかいないのか」

呆れ、嘆き、怒り、共にもう一度呟き、溜息も一つ。

厄介なモノを見つけてしまった。

酔いによってフル回転した好奇心は、どうやら俺の心を殺したいらしい。

さて、どうするべきか。

白状すれば放っておきたい。

こんなモノは見なかったことにし、家に帰って眠りたい。
そしていつものようにいつもの朝を迎え、トーストでも齧りながら
いつもの日常に戻りたい。
簡潔に言えば面倒なのだ。
救急車が必要なわけでもない。
警察に届けようにも届け難い落しモノ。
人間の形をした、人間の模倣である自動人形。
ヒトと同じカタチを持った、ヒトに創られた機械である。
けれでも、その姿はあまりにも人間のようで。
この惨状は人にとって、あまりにも悲惨過ぎた。
だから俺は、
「確認だ……、それだけして、さっさと帰る」
とりあえず、腹を据えてそう決めた。
「オイ、判るなら。俺を認識出来るなら返事しろ」

この際、面倒な考えは置いておこう。

先から面倒なんて立て続けに起こってるんだ、キリが無い。

傘を畳んで投げ出された足の間、真正面にしゃがんで視線を合わせる。

「オイ、判るか？……動いてるのは判っているんだが。感覚機か脳がイカれたか？」

声を掛けても、目の前で手を振っても反応は無い。

埒が開かず、パチンと脳天に指打ちを叩き込んでみれば目に芯が戻り、此方にピントを合わせてきた。

ふむ、まだそれなりに動くようだ。

だが半開きの口は閉じず、表情は未だに呆けている。

フリーズでも起こしたか？

読んだ本では家庭用ＰＣの比ではない処理速度とマルチタスクを持つ、とあったが。

「動けるか？動けるなら今すぐ帰れ」

現状、俺はコイツを確認するだけだ。
別に此処にいるも良し、持ち主の下へ帰るも良し、製作社へ戻るも良しだ。
このままこの場で壊れていくのも、まぁ、別に構いはしないな。

「俺の声が聞こえるか？」

ペチペチと右手で頬を叩いてみる。
目が合っているのなら視覚は正常、聴覚に異常があるのならばと触覚に訴えてみた。

「起きろ、見れば判ると思うが此処は自動機人ショールームでも粗大ゴミ置き場でも無いんだ」

頬を叩きながら声を掛ける。
その時、生暖かい空気が掌を撫でた。

「話に聞いていたが、本当に呼吸するのか、コレは」

機械に必要無い機能に軽く驚きながらも頬を叩いた。

そして、その声と衝撃に少女は動いた。

最初の変化は目に表れた。

ようやく俺を知覚したのか、二つの瞼がそれはもう大きく開かれる。

これは驚愕なのか、そうでないのか。

覚醒した意識は思考を回転させ、回転した思考は判断を下し、下された判断は体を動かす。

そして彼女は己の体を、泥とそれ以外で汚れた細い両の腕で掻き抱く。

自身を手放したくないというように、体を必死で庇うかのように。

踵が申し訳程度に土を削りながら、そのまま俺からずりずりと離れようとする。

しかし背後には冷たく硬いコンクリートの支柱があり、それ以上下がることを許さなかった。

がたがた、寒さによるものではない震えが広がるように体を侵す。

ゆらゆら、視線が不安定に泳ぎながらも視界からは離さない。

感情によって固まった顔の筋を、感情が強引に動かしてその表情を歪める。

彼女は自らの身体を精一杯用いて、人間の少女のように怯えていた。
空っぽのレンズで、俺の姿を観測しながら。

「変態共め」

思わず舌を打ってしまう、余計な思考も巡っていく。
脳の余剰スペースで巡る意識は、数時間前にこの場で起こっていた光景を容易に組み上げていく。
とても気持ちが悪く、酷く気分も悪く、至極機嫌も悪くなった。
要らない考えも、戯けた錯覚も頭を過ぎる。
俺の内より去来する妄想は視覚情報を補完し、勝手な想像を作り上げていく。
例えば骨、例えば肉、例えば血。
そして終いには、ありえないカタチを幻視した。
「お前、《ヴォーカロイド》とかいう音楽用の《自動機人（オート・ロイド）》だろう？それが何故、《性欲処理用機人（セクサロイド）》の真似事なぞしている？」

だから俺は、目の前の現実を積極的に肯定した。

「娯楽用自動機人という位置付けならば妥当と言えば妥当だが。それでも人らしい人格はあろうに」

思わず零れた本音を胸に仕舞う。

つまらない考えを冷静に自嘲した。

無駄なことを思ったものだ、俺にはまったく関係無い。

だから、この内に燻るものも不要と取り切って捨てる。

「オィ、意識があるなら主人の下か製作会社に帰れ」

それでも、努めて無関心を装う自分が情けないと思った。

表情を変えていない自信は無い。

声に感情が乗っていない確証は無い。

思わず手を伸ばしそうになる光景を、意思のオブラートで幾重にも覆い隠す。

それは偏に自身の価値観の防衛であり。

ともすれば身を滅ぼす、良心の暴走を必死に抑えての行いだった。

「俺はもう行く、判るな？此処で彷徨うな、次も襲われないとは限らん」

故に俺は“コレ”を捨て置く。

壊れればそれでもいい、帰るのならそれもいい。

如何様にでもするがいい。

俺はこれ以上、コイツを知覚していたくなかった。

固まった足に力を入れて、視線を逸らして立ち上がる。

あァ、畜生。

よく判らない、しかし確実に今は要らない感情が湧き上がる。

それは善に属しながらも人を破滅に導く、その場凌ぎの甘美な誘惑。

小さな自己満足を満たすために、急造された偽の心。

俺の嫌いな、一時の感情。

――俺は、“彼女”を――

「知るか」

一言を以ってその全てを、容赦無く、理性の鉄槌で叩き散らした。

纏わり付く何かを振り払うように、畳んだ傘を開く。

何故か大人しく開かない骨にイライラしながらも、心を固めて雨の中へ歩を進めた。

帰るために、この場所この時この状況を一刻も早く過去のものとするために。

そして、最後の最後に、

「……ではな、気をつけて帰れ」

そう言い残し、傘を濡らした。

紺の膜を頭上に広げて、橋の暗闇から抜け出す。

緩む河川敷から硬い土手へ、先の階段を上って戻る。

傘を叩く水の重さに空を見上げ、ほんの少し増した雨足の強さを気付かせた。

ぽろりぽろりと雫が落ちていく。
いい加減にして欲しい。

「……本当に、本当に」

アスファルトに立ってもこの湧き上がるモノが無くならない。
酔いも軽く引いており、思考の不純物が無くなっていた。
体の熱が引いていくのを感じ取り、意識も冷めているのが判る。
それに対して、酷く重くなった頭と体に辟易する。
変な飲み方でもしたのか頭に鈍痛が圧し掛かり、筋肉が固まっているように感じて。
すっきりしない首の下が、何故か一番重かった。
そんな体調そんな気分で徒に揺れる視界を御して、視線を意識して前に移す。
視界の隅、土手の下辺りに見えた黒の点を瞬き一つで掻き消した。
あァ、拙い。

「帰る、か」

栓無きこと、終わったこと。

終わらせたことは速やかに処理し、要らないモノは忘れよう。

需要が無いのだ、供給されても仕方ない。

俺は慈悲無き一般市民、エキストラは余計な火種に首を突っ込んではいけないのだ。

なに、アレも最終的にはソレ相応の場所へ帰るだろう。

それに、落し物なら落した誰かが探しに来るかもしれないのだ。

捨てられたのなら欲しいと思った誰かが拾うか、後日屑鉄（スクラップ）にでもなっている。

俺が気にする必要は無い。

家への道を、足を進めて歩いていけばいいだけだ。

「……要らない、必要無い、関係なぞ何も無いんだ、俺には」

ぱしゃぱしゃぱしゃりと水を踏む音が聞こえてくる。

あァ、拙い。

「帰る」

理性は迅速に判断を選び、下す。

それを再度言葉として、自身の脳へと暗示を掛けた。

そうと決まれば進むのみ、寄り道せずに帰りましょう。

予定がそれなりに詰まっているのだから、これ以上の夜更かしは明日に響く。

雨で冷えた体を温めたいが、浴槽に湯を張るのも面倒だしシャワーで済ませて早く寝よう。

これから行動はそうして決まった。

住居に帰って、手早くシャワーを浴びて、速やかにベッドに入る。

そら、こんなに簡単な三工程だ、間違えることもない。

だから俺は、この狭くなった歩幅を広げなくてはならないのだ。

あァ、拙い。

奥歯が痛い、顎が疲れる。

気付かずしていた歯噛みを緩め、深呼吸のような溜息を。

だがそれでも精神の、感情の手綱が握れない。
体を動かすには筋肉が必要で、筋肉を伸縮させるには信号が必要で、信号を送るには命令が必要で。
そして命令を発するのは自身を総轄する脳で在り、脳を支配するのは己の意思だ。
理性と本能という相反するものを混ぜ合わせ、環境と経験によって育まれる人格や価値観。
そういうものの集合体としてある《俺》が在る。
俺は、俺の意思で、俺の体を動かして、俺を生かしていたのだ。
だけど———

「畜生が」

この躊躇するように狭まった歩幅も、重い枷が付いたかのように遅い足運びも、俺の意思ではないと“願った”。
アルコールの所為と、無関係でいて欲しいと、何かの気の迷いと、自身の錯覚であると。

「あァ、畜生」

悪態が止まらない、溜息など連発中だ。

俺は何をしている？

別に歩を緩めることはない、足を止める必要なぞない。

これは何かの間違いではないのか？

だが、だとすれば何の、何が、何で間違い？

間違いであってくれ、なんて願望、現実逃避と同等だ。

だからこそ逃げられると思えない、現実は今正に背後から追ってきているのだから。

あァ、拙い。

そして、それは来た。

遠くから近くから落ちて響く雨の音、自身が履いている規則的な靴の音、時折聞こえる車やバイクの駆動音。

それに混じる断続的な水飛沫。

ぱしゃり、ぱしゃり、ぱしゃり。

音は足元ではなく背後から迫る、走るように俺を追ってくる。

俺の音ではない、誰かの音。

今日は厄日なのだろうか？

ワケの判らないモノの尾を踏んでしまったのか、はたまた得体の知れない何かを憑かせてしまったのだろうか。

無意味な疑問が酷く喧しい。

後悔の念が至極煩わしい。

どの辺りか、という程度ではなく今日という日を後悔している。

ふと腕時計で時刻を確認すれば１２時を回って１０分と少し。

……いや、待て、ならば厄日はこれからなのか？

あの居酒屋の一件は厄の範疇に入らないというのか？

ここまで歩くはめになったことは不運で片付けられてしまうのか？

今日という日付になってまだ１５分と経っていないのにこの状況、昼辺りにでも俺は死ぬのではなかろうか？

逃避できないと判っているのに無駄に回る頭、常日頃回っていれば成績も黒くなるというのに、まったく。

「……来るなよ」

口から零れる、偽り無き本音。

背後より来るモノが近づいてくる。

ぱしゃり…ぱしゃり…。

音はようやく、“歩を緩める”。

そしてそれは、追い付かれてしまったと教えてくれた。

「……何か用か？」

意を決し、振り返らずに、問う。

振り返ってしまえば、どうなるか判らなかった。

己の何かが剥がれていき、徐々に剥き出しになっていく錯覚がある。

ソレを見れば、後戻り出来ない予感に襲われたから。

「生憎と、俺は用など無いのだが」

己を装飾する。

我ながら臆病だな、至極。

こんな状況に置かれて尚、俺は自身を可愛がっている。

「用が無いなら俺は行くぞ？言い置くなら今の内だ」

関わりたくなかった、近寄りたくなかった。

言葉を交わしたくも無かったし、視線を合わせることすら今となっては拒否させて欲しい。

ならば拒絶すればいいのだが、俺はそれをしたくないと感じている。

二律背反、矛盾、対立。

拒絶したいと願うのに、嫌われたくないと思っている。

俺はアレを哀れんで、これ以上傷つけたくないと感じている。

あァ、もういっそあのまま壊れてしまえば良かったのに。

そうすれば、こんな面倒なことも起こらなかったというのに。

だからだろう、俺は要らぬ確認をした。

唯、黙ってその場を去れば良かったというのに。

俺は、ソレに対して言葉を発した。

言葉を返す機会を与えた。
だが、耳に届くのは雫の落ちる音だけで。
俺の問いに対する返答は無く。
俺は変わらず虚空に眼を向けながら、雨の中に立っていた。

「……無い、のか？」

最後だ。
これが最後と言い聞かせ、震える言葉をもう一度紡いだ。
畜生、落ち着け、俺。
俺が焦る必要が何処にある？
そんなことは、そんなモノは無いはずだ。
確かに十全、俺の事情が絡むが焦る要因は何一つ無い。
高鳴ってきた鼓動が邪魔臭い。
熱くなる体が疎ましい。
そして足が止まっていることに今更ながら気付く。

そうだ、俺は帰るのだ。

俺はこんなモノに関わる必要も理由も無いし、関わりたいと思っていない。

初めから、見つけたときからそうだったのだ。

俺は関わらないと、決めたのだ。

「無いなら、行くぞ？」

であるのに、口は勝手に声を発した。

これではまるで、構って欲しがる子供ではないか。

そんなモノになる心算は無い。

そんなモノになりたくもない。

俺は、嫌なのだ。

あんな面倒なモノに構うのは、関わるのは。

であるのに、

「……では、な。気をつけて、……帰れ」

この一言を出すために、どれだけ振り絞らなければならないのか。

自分で自分が判らない。

こんな、こんなモノ、早く何処かにやってしまいたい。

いっそのこと、捨て去ってしまいたい。

あァ、畜生、なんて腑抜けなのか。

何故こんなにも俺は後ろ髪を引かれる？

未練があるということか？

だとすれば、何だ？

何が、未練だというのか。

「……知るか」

吐き捨て、振り切るように、一歩、踏み出す。

———ぱしゃり。

後ろから、音がした。
それだけで、俺の足が止まってしまった。
「……畜生」
振り返るな、振り返ってはいけない。
振り返れば関わることしか出来ないと、そう確信している俺がいる。
こんなにも俺を惑わすソレを見てしまったら、逃げられない。
———ぱしゃり。
「来るな」
吐くならもう少し大きく吐けよ、俺。
そんなか細い声で、何が訴えられる。

――――首が回っていく。

振り返るな、振り返ってはいけない。

こんなにも俺を縛るソレを認めてしまったら、離れられない。

――――ぱしゃり。

「畜生」

――――瞼を閉じようにも閉じられない。

振り返りたい、振り返ってしまいたい。

こんなにも俺を悩ますならば、その悩みを払拭してしまいたいと考えた。

莫迦だ、それこそが間違い。

その好奇心が猫を殺し、その興味が人を壊すと、俺は知っているだ

ろう？

――――ぱしゃり。

まるで催眠に掛けられたかのように、体が回っていく。

掛けたのは間違いなくソレであり、掛けられたのは疑いなく俺であって。

水の音が手加減無く、俺の鼓膜を叩いていた。

そして、俺は振り返った。

振り返って、しまっていた。

「……畜、生」

其処に立っていたのは、長い黒髪を膝下まで流す、一人の少女の姿だった。

その身は水に濡れて、泥に汚れて、白に穢れていた。

だが、それに対して厭うことは無く、構うことも無く。

硝子の眼を瞼で隠しながら、求め訴えていた。

――――ソレは叫んでいた。

ありったけの力で叫んでいるのだろう。

必死の形相を面に出して、体中を震わせている。

折れそうな足を懸命に立たせ、崩れそうな身体を支えながらも。

ソレは、有らん限りのエネルギーで叫んでいる。

――――ソレは哭いていた。

あしったけの想いで哭いているのだろう。

両手は首下に当てられて、伏せた両目にも雨が流れている。

欠けていく心を掻き集めて、消えそうな願いをカタチにしようと。

ソレは、暴走寸前のＣＰＵを以って哭いている

しかし、とても理不尽だった。

「……なんて、厄だ」

やはり、あの橋の下に在った、《自動機人（オート・ロイド）》が其処にいた。

人間が創りし、自動人形であり、人造人間。

娯楽用に製造、生産され、その内でも歌唱目的に創られた、歌姫足る《ＶＯＣＡＬＯＩＤ》。

その機人が、叫んでいる。

その歌姫が、哭いている。

雨に打たれた、ずぶ濡れの体を震わせて。

人に壊された、ボロボロのＡＩを酷使して。

これまで、そしてこれからも在ったであろうモノを無くして。

これから、そしてこれ以上無くしていくだろうモノを手放さぬように。

ソレは間違いなく、組み上げられた機械である。

有機物と無機物の混合体、構成は似通っても材質が人間として間違っている。

ソレは決定的に人間ではない。
法律の上でも、観念の上でも、彼女に人間という在り方は与えられていない。
されど、“彼女”は叫び、哭いていた。
ヒトのように体を震わせ、両の手で首下を押さえて。
ヒトのように伏せた両の眼を俺に向けて、そこから流れる雨をも厭わずに。

――――ぱしゃり。

“彼女”が一歩踏み出す。
求めるように、訴えるように。
俺が見ている中で、“彼女”は唯、哭き叫ぶ。
俺の視界に人間はいなかった。
人間のカタチをした、何かが在った。
俺はそれを疑いなくヒトとして見てしまいそうになって。

そこに、例えようも無い、彼女の哀しみを幻視した。

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――――!!!!」

―――されど、

聞こえるのは水の音だけで―――

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0036m/

歌うモノ

2010年10月10日21時52分発行